

NPO 法人ピスカリについて

北海道のわらしべ会は、1998年に各種学校日本乗馬療育インストラクター養成学校を開校した。依頼北海道浦河町での障害者乗馬は肢体不自由者から障害児、高齢者乗馬、精神障害者や知的障害者とその対象を拡大してきた。2006年の同校閉校後も、乗馬療育部門を継続事業化するために、浦河わらしべ園内に乗馬療育研修センターを設けた。しかしながら、経営上のことから2015年に浦河わらしべ園乗馬療育研修センター閉所後、乗馬療育担当スタッフがJRA角居調教師バックアップの下（ホースコミュニティ）で、ボランティア団体や行政、医療機関等6つの団体からなる「うらかわ乗馬療育ネットワーク」を立ち上げ、2年後にはNPO法人ピスカリを結成した。浦河町が積極的に取り組む介護予防のための高齢者乗馬や障害児のための乗馬療育、特別支援学校の乗馬療育等その活動は公益的な活動として道内外から高い評価を得ている。この度、NPO法人ピスカリ（アイヌ語でピスは浜を、カリは往来を意味する。浜から5キロほど内陸にある地域を古よりピスカリと呼ぶ）にて大阪のわらしべ会スタッフが研修の機会を得たことは意義深く、今後は、ピスカリとの連携で関西地区での障害者乗馬を普及発展させていく契機となればうれしい。なお、上記のような浦河町での乗馬療育の歴史を整理すると、以下のようになる。

（浦河町での乗馬療育）

○浦河わらしべ園開所（1996年10月）

↓①入所利用者対象に乗馬療育を始める

②浦河町立児童デイサービスはまなす学園の乗馬療育を始める

○各種学校日本乗馬療育インストラクター養成学校開校（1998年4月～2006年3月）

↓①、②に加え、

③外部の障害児者に乗馬療育を始める

○浦河わらしべ園乗馬療育研修センター開設（2006年4月～2015年3月）

↓①、②、③に加え、

④介護予防のため的高齢者乗馬を始める

○一般財団法人ホースコミュニティ開設（2015年4月～2017年3月）

↓*社会福祉法人わらしべ会の完全撤退、事業と人材を移行

*乗馬療育の発展・普及のため、ホースコミュニティを中心として町内の医療機関、乗馬療育利用者の団体、行政等からなるうらかわ乗馬療育ネットワーク設立。

○NPO法人ピスカリ開設（2017年4月～）

↓うらかわ乗馬療育ネットワークを母体としてNPO法人ピスカリ開設。

このように、浦河わらしべ園開所以降20年にも及ぶ浦河町での乗馬療育は、NPO法人ピスカリに事業継続されることとなった。因みに、NPO法人ピスカリ代表理事は、日本乗

馬療育インストラクター養成学校教員の江刺尚美氏（社会福祉士）であり、乗馬療育研修センター以来のスタッフである小島愛子氏（理学療法士）が中心となり、浦河町乗馬公園スタッフとの連携で乗馬療育を展開してゆく頼もしい資源である。また、この乗馬療育は、浦河町のみならず、急速な過疎化が進むえりも町・様似町にとっては希望の星であり、大きな役割を担っている。私たちも、ピスカリとの交流を深め、彼らの真摯な乗馬療育に対する姿勢や取り組みを学んでいきたいと思う。



浦河町乗馬公園管理事務所

NPO 法人ピスカリは、乗馬公園管理事務所内にある。乗馬公園スタッフとは同じ事務所で机を並べて仕事をしていた。町の期待の大きさがわかる。なお、この建物は同町出身西洋画家の伏木田光夫美術館（作品は全て同氏の寄贈）にもなっている。1989年開催のはまなす国体での馬場馬術競技会場としてクラブハウスの役割を果たしたという。覆馬場（全天候型乗馬施設）や厩舎も併設し、馬の管理も併せ、乗馬療育環境としては手本となる施設である。



高齢者乗馬の様子



乗馬公園覆馬場



乗馬公園内厩舎



JRA 日高育成牧場屋内坂路馬場

かつて、私自身4年間この地で過ごした。今でも多くの方々との交流は続いている。辞して10数年の月日が経つものの、町の人々の目はいつも温かい。町内には高齢者施設、障害者支援施設（身体・知的・精神）、障害児デイサービスセンター、自立支援施設等々多くの福祉施設があるが、人口1万2千人の町の規模に比して、10万人規模の福祉施設がある。その中には、精神障害者の分野で国内はもとより世界的に著名なベテルの家や、大手企業とタイアップして薬草づくりに挑戦している向陽園も興味深い活動を提供している。因みに、この向陽園には吉永小百合・渡辺謙主演の映画「北の零年」で使用した家屋が移築され、開拓団の厳しかった明治の暮らしがよくわかる。福祉施設がこのような発想で文化的な哲学を有していることに心からの敬意を表す。

浦河町は、馬を取り巻く多くの資源に恵まれた地域であることは間違いない。JRAの育成・調教施設の屋内坂路馬場は、全長1キロ（1000m×7メートル）の直線距離で調教できる素晴らしい施設があり、見るものを圧倒する。馬に携わる生産者、育成者、調教者、獣医、研究者、装蹄師、厩務員等々人材の宝庫でもある。一方、僻地故に人口減に歯止めがかからない現状を有す。町おこしの中核としても福祉と馬を融合した活動は、町としての生き残りをかけた取り組みであり、かつてこの地に魅せられた村井正直先生の乗馬療育に対する思いは、多くの馬を愛する人々によって乗馬療育の継続、普及・発展のために尽力されるのだろう。専門的な知識や技術も重要であるが、何より大切なことは、“馬の背に幸福がある”（ドイツでは古くからそういわれている）ことを当事者並びにその活動を支える人々が理解していることだと思う。北海道わらしべ会の浦河町における乗馬療育の導入としての存在感は大きかった。後に続く人々の思いが、NPO法人ピスカリに繋がり、一人でも多くの障害をもつ人々を幸福にしてくれることを願うばかりである。限界集落地といわれるこの

町は、現在北海道の中でも移住希望で人気を博しているが、人口減対策としては大きな成果をあげているとはいえない。馬と福祉をつなぐ文化がこの町の未来を切り開くにはあまりにも突き付けられた課題は大きい。厳しい未来は、今後都市部でも共通した課題となり、多くの解決しなければならない宿題があることを忘却してはならない。

20有余年浦河町に関わってきたが、この町のすばらしさ、ここに住む人の純朴さを多くの人に知っていただきたいと再認識した。もっとこの町のことを知りたい・・・人に情報提供していきたい。

以上

文責：丸山正雄